オンラインQ&Aサイトにおける不幸と個人化
――「呪い」の語に着目した身上相談を通じて――
Misfortunes and Individualization in an Online Q&A Site: Research on Personal Consultations Focused on the Word “Curse”

伊藤 慈晃
ITO Shigeaki

This paper attempts to clarify the relationship between social misfortunes and individualization in modern Japan by analyzing an online Q&A site using a qualitative method and a text mining analysis. In particular, the study examines cases by sorting for the word “curse,” which could be defined as the opposite consciousness from individualization. Two findings were obtained as a result of analysis. First, unfortunate situations sorted by the word “curse” tend to be related to family. Second, in this situation, questioners tend to avoid social support and reinforce their beliefs in individualization to solve their problems. These findings indicate that misfortunes in Japan are not seen as caused by individualism, but are, instead, maintained and reproduced by individualization.

キーワード：個人化 (Individualization)、身上相談 (Personal Consultation)、不幸 (Misfortunes)、オンラインQ&Aサイト (Online Q&A Site)、家族 (Family)、呪い (Curse)

1．「個人化」と不幸

今日、我々の生きている社会の背後には、日常生活の些細な問題から人生に関わるような問題まで、基本的には個人の選択によって決定されるべき、という個人主義的前提が横たわっている。A. Giddensによれば、こうした個人に与えられた選択の自由の増大は、テクノロジーの進展とグローバル化により、地縁・血縁に基づいた社会的紐帯から個人が切り離されたことによって生じてきているという（Giddens 1991=2005: 32-4）。本稿ではこうした個人の選択の自由が重視されるようになってきている状況を「個人化」と呼ぶ。

社会が個人化するということは、R. N. Bellahのいうように個人が「個人を超えた高次の真理にもとづいてではなく、個々人自らが判断する生活効率の基準にもとづいて、自らの演ずべき役割となすべきコミットメントを選択することができる」（Bellah 1985=1991: 55）ようになった側面もある。しかしそれは、裏を返せば、個人が選択の自由を強いられ、あらゆるリスクにも個人で対応せねばならないという重い自己責任を負わされているともいえる（Beck 1986=1998: 266-7）。こうした危機的な状況において個人は、警察や法律家、セラピーや相談所など様々な専門家システムに頼ることで乗り越える場合もあるという

（Giddens 1991=2005: 44）。

本稿では、こうした個人化という状況に対して、特に個人の生活における「不幸」との関連から考察してみたい。もともと、「不幸」と感じられる状況は自身の価値観や理想と、現実の状況との間に齟齬をきたしている時に生じる意識である。そのため、人が何に不幸を感じているのか、また、どう乗り越えようとしているのかということを通じて、人の本音の価値観を知ることができる。個人が何を理想とするのかではなく、生活に根差した個人主義のあり方を探ろうとすることは、社会学的にも意味のあることだと考えられる。

これまで、「不幸」と個人化との関連は特に、新聞紙面上における身上相談を対象として研究されてきた。本稿では、現代の不幸について、オンライン Q&A サイトにおける身上相談について、テキストマイニングとケース分析の二側面から分析する。特に、不幸の原因を他人に見出そうとする、個人主義的価値観の対極にある「呪い」という意識に関連した相談を対象に分析を行うことによって、個人主義的価値観がどのように「不幸」と結びついているのかを考察してみたい。

２．先行研究と本研究の目的

身上相談から個人の不幸と社会構造の関連に着目したのは、見田宗介（[1965] 1984）である。見田が身上相談に分析対象として着目したのは、身上相談には日常生活において曖昧なままになっている各人の身の上が、調査員はもとより、親しい人にも言えないようなプライベートな事情まで踏み入って詳細に書かれている点にある(1)。見田は身上相談に現れる個々の不幸の諸要素を抽出した上で、それらの因果関係を図式化・統合する形で「不幸」を生み出す社会構造を浮き彫りにした（見田 [1965]1984）。

以降、身上相談を分析対象とした研究は、太郎丸博（1999）、大瀧友織（2002）、野田潤（2004）、赤川学（2006）、池田知加（2017）などによって展開されてきた。太郎丸は、読売新聞の「人生相談」に投稿された身上相談について、1934 年、1964 年、1994 年についてそれぞれ 100 件ほどの記事を集計した。そして人間関係の相談が減少する一方で、自身の性格や精神的問題に関する相談が増加していることから、戦後日本社会における個人化の傾向を明らかにした（太郎丸 1999）。野田は、1914 年～2004 年の間に「人生相談」に投稿された家族に関連する身上相談約 600 件を抽出し、ケース検討を通じて個人化について考察した。そこから、親子であっても個人対個人としてのコミュニケーションを重視するべきだという家族意識の変容を明らかにした（野田 2004）。こうした個人化に基づいた家族関係の認識は、大瀧の研究でも報告されている。大瀧は 1953 年から 1999 年にかけて「人生案内」に投稿された約 1700 件について、回答文と質問文を比較した。そして自由恋愛が主流になったことで、夫婦間にもお互いがお互いを個人として認めた上での対等で情緒的な関係が求められてくるようになったことを明らかにした（大瀧 2002）(2)。

こうした家族関係における個人化は 2000 年代においてもみられるようである。池田は 2000 年代も含めた身上相談について回答文の分析を行った。そして身内の問題に対し、客観的に事務的に対処するべきという「冷静」（池田 2017: 37）さが重視されてきているということを明らかにした。また、こうした「冷静」な対応は、夫婦や義理の親子関係について顕著だが、その一方で、実の親子関係については、共感に基づいた回答が中心であり、

個人化の影響の限定性を指摘している（池田 2017）。

以上をふまえ本研究の目的を、オンライン空間での身上相談から現代の不幸の認識における個人化の影響を明らかにすることとする。そのために、オンライン Q&A サイトを分析対象とし、質問文から現代の不幸の傾向を明らかにし、更に回答文とそれに対する相談者の応答を中心に、不幸に対してどのように向き合うべきと考えられるのかを分析する。

３．分析

(1)「呪い」と「個人化」の関係

本稿では、オンライン Q&A サイトにおける身上相談を分析対象として、個人化と不幸の関係について考察する。オンライン Q&A サイトは、相談者がサイトに質問を投稿し、ネット上で回答を募れるサービスである。通常、回答は複数件寄せられ、その中から相談者は最も参考になった回答をベストアンサーとして選択できるようになっている。新聞紙面上の身上相談がより身近になったものがオンライン Q&A サイトだといえるだろう。

ただし、オンライン Q&A サイトには膨大な量の Q&A が蓄積されている上に、文字数も質問ごとにまちまちで、さらに質的にも切実なものから冗談のようなものまで多岐にわたる。今回のような不幸に関連する相談を分析するためには、なるべく切実な質問の割合が多く、かつ、全体としての件数が多くなり過ぎないようにする必要がある。そこで、本稿では「呪い」をキーワードとして検索にヒットした質問について、分析対象とした。

「呪い」という意識は、「誰かを恨んだり、妬んだり、はたまた呪いたくなる心性」（小松 2014: 21）のことであり、自己の不幸の要因を他人に見出そうとする意識だといえる(3)。小松和彦によれば、超自然的な現象がリアリティを持っていた民俗社会においては、「呪い」という意識は、実際に呪いの儀式を行い発散することで、直接的な報復を回避し、間接的に社会的な秩序の維持に貢献していたという（小松 2014）。

しかし、現代社会においては「呪い」のリアリティは薄れ、さらに個人化によって「自己責任」において行動するべきというモラルが浸透している。とはいえ、相手のせいとしか思えないような状況は、日常生活の中で現実として生じているだろうから、「呪い」の意識自体が社会から失われたわけではないだろう。不幸の原因を他人に見出そうとする「呪い」という意識は、本質的には個人主義的価値観の対極に位置する意識であるからこそ、それに関連するケースではより明確に個人主義的価値観の性質が表れると考えられる。もちろん、そうした誰かを呪いたいという、意識がせりあがった状況は、必ずしも一般的な状況とはいえない。しかし、個人主義の対極に位置する「呪い」という意識が芽生えた時に、個人主義的価値観がどのように表出するのかを明らかにすることは、これまでの研究とは別の側面から個人化について捉え直す契機になりえるだろう。

(2) データの概要

本稿で分析する「呪い」に関わる身上相談は，オンライン Q&A サイト「OKWAVE」から抽出した(4)。データの収集については、「Octoparse（Ver.7.2.2beta）」を用いた。抽出したデータは、質問年月日、質問者ハンドルネーム、回答者ハンドルネーム、質問タイトル、質問本文である。質問文は、「呪い」で検索をかけてヒットしたものを抽出した。抽出期間

は 2001 年 1 月 7 日から 2019 年 7 月 30 日までで、3606 件であった。その中から「まじない」としてヒットしたものを除いた結果、1719 件が残った。更にここからは目視で、身上相談に含まれない、娯楽に関わるもの、単に呪いの存在について尋ねているものなどを除外した。その結果、300 件が残った。

300 件に対して、そこに書かれている不幸の要素について、それぞれカテゴライズしていった。不幸の要素については、表 1 の通りである。見田（[1965]1984）の不幸の種類をもとに、大カテゴリ 7 種類、小カテゴリ 32 種類の要素を用いた。また、非行に関する「青少年」カテゴリに該当する相談はなかったので削除した。代わりに、精神疾患や健康に関連する身体・精神カテゴリを付け加えた。1 件について 1 要素ではなく、複数の要素が含まれている場合は全てカウントした。

図 1 は今回の OKWAVE において得られた「呪い」に関連した身上相談の大カテゴリ別の不幸の要素である。まず、要素数として最も多かったのは、「生活」の 103 件で、全体の 24%を占めていた。次いで「その他」が 115 件で全体の 27%を占めているが、これは表 1 より、「心霊体験・夢など」が 87 件と多かったことの影響である。「心霊体験・夢など」は気にかかる夢について夢診断を求める「夢占い、心理学に詳しい方」（投稿日：2010 年 11 月 26 日）や、テレビの電源が勝手についてしまうことについて相談する「家でおこる怪奇現象」（投稿日：2011 年 11 月 19 日）のように、怪奇現象に関する相談が多かった。これらは本稿の目的からは逸脱するので、考察の対象としない。

「生活」では「経済問題」が 31 件、次いで「職場の対人関係」が 22 件と多く見られた。「経済問題」は、例えば会社が倒産した後の新しい職場に関する相談「悔しくて死にそうです」（投稿日：2011 年 5 月 4 日）であったり、詐欺被害に関する「オークション詐欺に遭いました。騙した犯人を精神的に追いつめたら犯罪？」（投稿日：2006 年 6 月 28 日）などが、「職場の対人関係」では同僚に対する接し方に関する「大嫌いな同僚に殺意が湧きます。絶対許せないです」（投稿日：2015 年 8 月 19 日）といった相談が見られた。次いで「身体・精神」は 78 件で全体の 19%を占めていた。自分や周囲の人間の精神疾患に関する問題は合わせて 47 件であり、「病気・身体障害・容姿」に関する問題は 31 件であった。「家族」に関する相談は 73 件で 17%、その内 33 件が「親子関係（母）」で最も多かった。男女関係に関する項目は「純愛」、「夫婦」、「結婚」であったが、3 項目合わせて 53 件で全体の 13%を占めていた。以上のことから、「呪い」によるキーワード検索によって得られた身上相談が、要素数という観点からみた場合には多様なカテゴリにまたがりケースを収集できているといえる。

表１　不幸の要素（太字・網掛け部分は新規追加要素）

純愛	失恋・異性にだまされた	19
	その他の恋愛関係	9
結婚	婚期が遅れた・縁談がない	5
	結婚に親・その他の反対	2
	その他結婚問題	2
夫婦	浮気	8
	配偶者の性格	5
	その他夫婦関係	3
家族	ヨメとシュウトメ	3
	再婚・後妻・連れ子関係	2
	兄弟姉妹関係	8
	親子関係（父）	11
	親子関係（母）	33
	家庭内暴力	13
	介護	3
生活	経済問題	31
	職場の対人関係	22
	友人関係	9
	学校の対人関係	15
	学校中退・登校拒否	2
	就職	2
	その他生活問題	10
	ネットトラブル	8
	他人	4
身体・精神	病気・身体障害・容姿	31
	精神疾患（自分）	33
	精神疾患（他者）	14
その他	**事故**	2
	親類の死	12
	知人の死	5
	宗教問題	9
	心霊体験・夢など	87

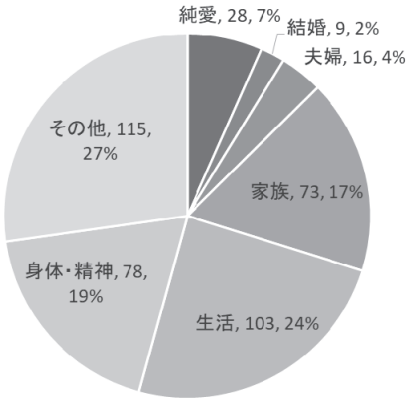

図１　大カテゴリ別不幸の要素

(3) 共起ネットワークにみる全体の傾向

オンライン Q&A サイトの場合、新聞紙面上の「身上相談」よりも量と質の面で大きくばらつきがあるという点に相違があり、要素数だけの観点からでは不十分である。というのも、一文だけの相談から、4000 字を超える長文の相談もあり、さらに内容としても具体的な背景まで言及されているものもあれば、感情に任せて書き連ねているものもあるからである。

そこで次にテキストマイニングを用いて、全体の傾向を明らかにしてみたい。テキストマイニングとは「複数の文書データの内容を総合的にとらえることで初めて得られる知見を抽出するための内容分析の技術」（那須川 2006: 1）である。ここでは、フリーで利用することのできるテキストマイニングのソフトである「KH Corder 3」を用いた。具体的には、文書全体における語の使用頻度を確認した後に、テキスト全体の中で結びつきの強い語のつながりを明らかにできる共起ネットワーク分析を行った。

まず、300 件の身上相談全体で 6577 の単語が出現し、1 つの相談あたりの文の平均数は 4.26 であった。表 2 は、「呪い」関連の身上相談で抽出された名詞について、使用される頻度の多かった上位 20 語のリストである。最も多かったのは「自分」で頻度は 527、次いで「人」は頻度が 437 であった。3 番目に多かったのが「母」で頻度は 333 であった。更に上位 20 件のうち「母」、「父」、「子供」、「夫」、「家」、「家族」、「親」は「家族」に関連する

語であった。「生活」に関連する語は「友人」と「会社」であることと比べると、語の使用頻度では「家族」関連が突出しているといえる。

こうした「家族」関連が身上相談において中心を占めている傾向は、図 2 の共起ネットワークにおいても確認できた(5)。共起ネットワークの全体の構造を見ると「自分」から 10 語、「母」から 9 語が結びついており、「自分」と「母」との関係が語のネットワークの中心であることが見て取れる。「自分」は「人」や「相手」、「人間」、「気持ち」といった語が結びついており、身上相談をする上で使わないのが難しいと思われるような語が結びついている。「家族」関連の語である「父」、「子供」、「家」、「家族」、「親」は全て「母」を中心に結びついており、「家族」の問題は「母」と関連した形で語られる傾向がある。

表 2　抽出語リスト

#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	自分	名詞	527
2	人	名詞C	437
3	母	名詞C	333
4	呪い	名詞	238
5	友人	名詞	147
6	父	名詞C	138
7	家	名詞C	136
8	相手	名詞	128
9	親	名詞C	120
10	気持ち	名詞	118
11	子供	名詞	100
12	夫	名詞C	92
13	気	名詞C	91
14	家族	名詞	87
15	人間	名詞	87
16	会社	名詞	82
17	方法	名詞	67
18	女性	名詞	63
19	人生	名詞	62
20	言葉	名詞	61

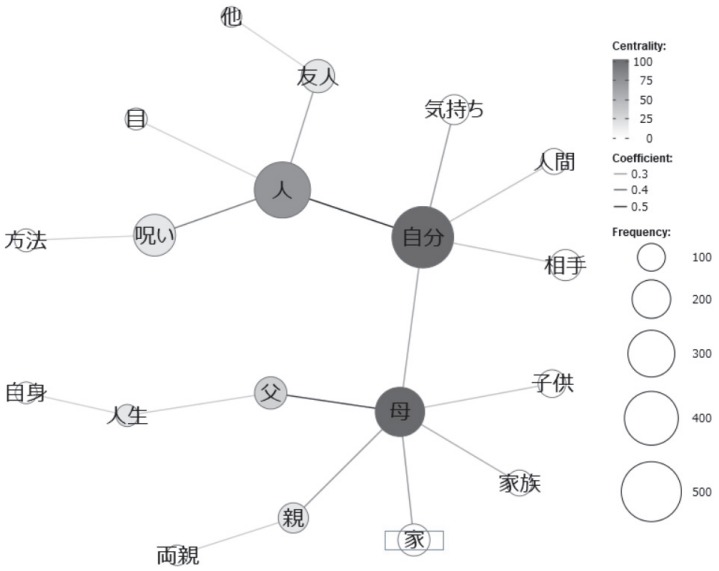

図 2　語の共起ネットワーク図

(4) 家族と不幸

次に、家族における不幸のケースについて、直接的に母が相談内容の対象になっているものと、母以外が相談内容の対象となっているものを取り上げてみたい。なお質問文は、内容や文体を損なわない範囲で編集した。末尾に元々の文字数を記載することとする。まず、母が相談内容の対象となっているものとして、母親によってキャリアウーマンの道を挫折せざるを得なくなった相談をケースにみてみたい。

1）親子関係（母）

ケース 1【幸せになりたい】

私は優等生でした。親に反抗なんかしたことなく、1 人で勉強し男遊びなんかしないで、都内の有名私立大まで行きました。就活も大手企業から沢山内定出てて、夢と希望でいっぱいでした。でも父の会社が倒産。母が精神病になり、私の人生は滅茶苦茶になりました。母は昔から、私たちを新興宗教に連れていったり、父の会社のお金を使いこんだり、頭がおかしい人でした。母は精神病で退院した後、田舎に帰りたいと大暴れしたので、結局私は内定をけり、母と暮らすことになりました。しかし、母からは包丁をつきつけられる、ウンチをなげつける、「お前は私の面倒を見ないといけないから結婚できない」と呪いのように毎日言われる、など色々なことをされました。仕事で苦労している父のために、何とか母との生活を我慢してきたけど、三回目の強制入院で限界がきて父に全てを話したところ、母を引き取ってくれました。私の 20 代はこうやって終わり、今 30 歳です。今さら仕事で成功なんか無理です。昔からかわいがってくれていた副社長をしているおじさんから、開業医の息子とのお見合いをすすめられても、キャリアウーマンが夢だったから、ちょっと専業主婦とかも考えられません。どうしても母を許せないのですが、なんとか母への気持ちにけりをつけ、前をむきたいんです。アドバイスお願いします。（投稿日：2016 年 2 月 15 日、総文字数：1835 字）

この相談は、30 歳の女性からのものである。相談者は大学まで順風満帆に過ごしていたが、父の倒産をきっかけに母が精神疾患となり、20 代は看病で終わったのだという。

では、この相談に対してどのような回答が行われたのか、確認してみたい。この相談に対する回答は 5 名から行われた。5 名の内、1 名はごく短く「忘れるべき」と述べているだけなので考察の対象外とする。他の 4 名は、母親に対して理解をしようとすることをやめるべき、つまり親ではなく理解できない他人として接するべきだというものであった。子どもは父母を敬うべきであるから耐えるべきである、というような伝統的な家族観に基づいた回答はなく、いずれの回答も、池田の指摘する「冷静」さ（池田 2017: 37）という個人化の特徴を備えていた。その上で、説得の仕方はそれぞれで、具体的な行動を示す回答、共感を重視する回答、客観的な認識を重視する回答、に分かれた。

具体的な行動を示す回答は、そもそもキャリアウーマンになれるかどうかは本人の努力次第だと述べ、その上で結婚とも両立させたいなら「おじさんが良い縁談をもってくるというのなら、その条件に仕事をさせてくれる人を追加してもらったらいかがでしょうか」と提案している。そして、現実的な行動指針を提示した上で、母への思いに対しては「受

け入れることができないなら、忘れる以外にないです。とりあえずカウンセリングなどにも通ってみてはいかがでしょう。いきなり自力で呪縛から逃れろと言われても無理でしょうから」と述べ、自分だけで解決しようとせずに専門家に頼るべきだとの見解を示している（回答 No.2）。こうした現実的な行動指針を示した者はもう一人いたが、「何かのせいにせず 今の環境でやれる事をやったら良いです。それが出来なければ キャリアウーマン？いや、ただの愚痴しか出ない人ですよ」（回答 No.1）と、相談者に対してやや批判的であった。

共感を重視する回答では、まず回答者が、躁鬱病の母がいたこと、強制入院させ 20 年寝たきりの末亡くなったことを明かしている。そうした自身の経験を語った上で、「親は『心の中で殺していい』のです。そういう狂気の母親の腹は食い破ってでてこないと共倒れになります。あとから、そんなに恨むのなら、最初から『親を見放す』ことです」（回答 No.3）とかなり強い表現で説得している。

上記の 2 つが匿名だったのに対して、3 つ目の客観的な認識を重視する回答の回答者はアカウントを登録している 50 代男性で、370 回の回答をしており、102 件がベストアンサーに選ばれている（ベストアンサー率は 27%）アカウントだった。まず、回答者は相談者に対して、母は「アスペルガーの積極奇異型とか、そういう感じのいわゆる発達障害なのでしょう。この手の人は ADHD などの特徴も併せ持つことが多く、片付けができない、予定通りに行動できない、忘れ物が多い、場合もある」と説明し、母親でなく、「頭の機能的な構造が異なる人」として認識することを強調する。その上で「あくまで頭で理論的に理解しないといけないのです。そうすれば怒る必要を感じなくなるでしょう。怒るだけバカバカしいのです」と、行動ではなく冷静に理解するべきということが述べられている（回答 No.6）。

次に、客観的な認識を重視する回答と他の回答の違いについて検討する。まず、具体的な行動を示す回答は、叔父や専門家などとの繋がりを、また、共感を重視する回答は、回答者自身が同じ当事者としての共通性を示していた。それに対して、客観的な認識を重視する回答は、誰かに頼るということを促してはいないという違いがある。あくまでも相談者個人の問題として「理論的に理解」していった先に「怒る必要を感じなくなる」と示しているのである。社会的な繋がりよりも、個人的な理解を突き詰めた先に救いを求める回答 No.6 がベストアンサーに選ばれたということは、相談者自身の不幸に対する矛盾した態度の表れだといえるだろう。

こうした不幸に対する矛盾した態度は、もう 1 つのケースでより顕著になっている。相談者は高校生の女性で、兄からの家庭内暴力に関する相談である。未成年であり自身で選択できる余地が少ない点で、より深刻な状況だといえるケースである。

２）兄弟姉妹

ケース２【頭がおかしい兄に悩まされています。助けて下さい。】

私は小さい頃からずっと兄に悩まされています。兄の奇行は数え切れないほどで、鉄パイプで本気で殴られたり体を固定されて BB 弾で打たれ続けたり監禁されました。親にも散々訴えましたが母親は何もしてくれず、父親は兄と同じただ怒鳴って殴るだけなので状況は何も変わりませんでした。私は今高校生なのですが兄は二十歳過ぎて

まだ家を出て行きません。最近私はバイト代をためたお金で家具などを買い、やっと理想の部屋を持てました。ところが兄は無断で部屋に入ってきて好き勝手してきます。鍵をつけたらドアごと壊されました。父親はもうおらず、母親はまた放棄。周りの大人もいい加減なことしか言いません。兄を本当に許せないんです。毎朝起きるたびに部屋に入った形跡を探して、ヒステリックになり精神的に壊れそうです、死ぬ事ばかり考えてしまいます。兄の目に入る湯船などで血だらけになって死んで呪いのような遺書を書いて今までされてきた事を全て書いてやろうかと思います。兄のせいで死んだと皆に知ってほしいと思ってしまいます。もう我慢できない、訴えたりしてやりたい、もう無理です。何かいい方法ないですか。ご協力お願いします。（投稿日：2017年3月29日、総文字数：1347字）

以上は、当時高校生と思われる女性から、家庭内暴力を繰り返してきた兄に関する相談である。しかし、「呪いのような遺書を書いて」、「兄のせいで死んだと皆に知ってほしい」と書いてあるように、相談者自身の憤りは、一緒に住んでいるが何もしない母や、「兄はもう殴らない悪い子じゃない」といい加減なことしか言わない周囲の大人などにも感じていることがうかがえる。

この相談に対しては、ベストアンサーは選ばれていないが、8 件の回答が寄せられた。ケース 1 と同様に、兄に対して妹なのだから我慢するべきというような伝統的な家族観に基づいた回答は皆無であった。「そんな嫌な実家の自分の部屋をまだ愛そうと努力するあなたが可哀そうになってきています」（回答 No.1）と共感を重視するものもあったが、今回のケースでは、8 件のうち、7 件が「警察に相談」（回答 No.2）、「『児童相談所』に相談」（回答 No.8）、「自助グループなどに参加」（回答 No.3）、「学校のカウンセリング」（回答 No.4）など、何らかの具体的な行動を提案していた。加えて、中には「私を含めこうした素人が集まる Q&A サイトでは根本的な解決にならない感情論が多く集まりやすいので本当の解決にならない意見が多くなってしまう事すらあります」（回答 No.3）と、Q&A サイトの意見の捉え方自体についてもアドバイスをするものもみられた。

ところが、こうした何らかの外部の団体に助けを求めることについて、「支援団体の方に話を聞いてもらうのは簡単ではないですが真剣に考えてみます」（回答 No.3 への返信）と答えており、助けを求めることが「簡単ではな」く、ためらいが感じられる。その一方で、「めちゃくちゃ怖い思いされましたよね。容易には想像できないくらいつらい思いをされてきたのだと思います」（回答 No.4）という回答に対しては、「今まで家族には自分が悪い事するからなんじゃないの？お兄ちゃんはそんな事しないよと否定しかされてきませんでした。ずるいかもしれませんが初めて肯定して頂いて泣いてしまいました。」（回答 No.4 への返信）と答えている。このことから、相談者は客観的に自身を見つめなおすことよりも、自分の置かれている立場に共感してくれることこそ第一に必要としていたことがうかがえる。

さらに、相談者の応答で重要なのは、「自分」への言及の多さである。「勇気を出して自分で自分の幸せを手に入れれるように頑張りたいと思います。ありがとうございました！」（回答 No.4 への返信）、「自分から反抗して殴られにいく勇気もないのにぐちぐち言っている自分が情けないです。自分を守るためには我慢も必要だしまず乗り越えなきゃいけない

事がありますね。頑張ります」（回答 No.2 への返信）と述べているように、「自分で自分の幸せを手に入れ」る、「自分から反抗」する勇気がない、「自分が情けない」、「自分を守る」と、繰り返し「自分」という言葉を使っている。このように何度も「自分」に言及していることから、相談者が今までも個人主義的な自己像にもとづき「乗り越えきゃ」と我慢してきたことが推察される。明らかに家族の問題であり、個人でなんとかできる問題でもないことにもかかわらず、最終的には再び自分自身の問題に帰着しているのは、ケース 1 と同様だといえるだろう。

４．考察と今後の課題

本稿の目的はオンライン空間での身上相談から、現代の不幸の認識における個人化の影響を明らかにすることであった。そのために、オンライン Q&A サイトを分析対象とし、質問文から現代の不幸の傾向について明らかにした上で、回答文とそれに対する相談者の応答を中心に、不幸に対してどのように向き合うべきだと考えられるのかを分析した。特に、不幸の要因が他人と結びついて語られるという個人主義的価値観とは相反する状況に着目するため、「呪い」という語をキーワードにケースを選定した。

まず、オンライン Q&A サイトにおける身上相談について、要素数という観点からは「生活」、「身体・精神」、「家族」など多岐にわたっていたが、テキストマイニングを行った結果、「自分」を中心とした語群と「母」を中心にした家族に関わる語群が中心的であることが明らかになった。

次に個別の身上相談について 2 つを取り上げて詳細に分析した。ここでは、精神疾患を患った母に関する相談と、家庭内暴力を繰り返していた兄に関する相談の、回答文とそれに対する応答を取り上げた。まず、回答文から明らかになったことは、どちらのケースでも伝統的な家族観に基づいたような回答はなく、家族であっても他人として認識するべきという点が共通していたということである。池田（2017）が夫婦や義理の両親などに対して他人として接するよう助言する「冷静」さは、本稿では母と兄という血のつながりのある関係においても確認できた。つまり、実の家族間においても個人主義的な価値観に基づいた関係性が志向されているといえるだろう。

次に、相談者の応答に着目してみたい。まず、ケース 1 では共感や具体的な行動を提案する回答といった他者との別の関係性を構築しようとするものよりも、客観的に母を「病気」として認知した先に、怒りすらなくなるという回答がベストアンサーに選ばれていた。ケース 2 では、ベストアンサーこそ選ばれていなかったものの、各回答への応答では、「自分」という言葉が多用されており、自分自身が堪え忍ぶことで、不幸を乗り越えようとしていることが確認できた。つまり、どちらのケースにおいても、相談者は個人で対処しきれなくなった結果相談したのにもかかわらず、より個人主義的な価値観を徹底させることで「不幸」を乗り越えようとしていたのである。

本来、個人化した社会は Giddens（1991=2005: 44）が指摘するように、自己の危機的な状況に対して、専門家システムに依拠することで対応する社会だといえる。しかし、本分析から明らかになったことは、個人の責任のもとでは対処できないほどの「不幸」な状況に陥った場合、逆に専門家システムへの接触が放棄され、「個人」としての責任と自覚が更

に強化されるということである。不幸な状況下で個人主義的価値観が強化され更に孤立をもたらすというのは、個人化の「呪い」とでも呼びうる事態である。

こうした状況が、家族に固有のものなのかどうかは別途検討が必要になると思われる。しかし、より重要なことは「呪い」という言葉が選ばれることで、「呪い」に付随する超自然的なイメージが、不幸な状況を不可避で解決しがたい事態として象徴化している可能性である。「呪い」という語が流通している社会的背景を明らかにすることは、現代日本における不幸についてより深く理解するために今後必要なのかもしれない。

註

(1)　「身上相談」の価値は、そこに書かれている内容が事実だから価値がある、ということではない。鶴見俊輔は、「身上相談」の価値は、信憑性にあるのではなく、そこに人々の思想が反映されている点にあると指摘する（鶴見 1991）。つまり、身上相談はそこに書かれている出来事が事実だから価値があるのではなく、人々がどのような出来事をもって「現実」であると主張しているのか、という点に注目するからこそ価値があるのだ。そしてこうした事情はオンライン Q&A サイトの「身上相談」においても同様だろう。

(2)　「身上相談」は特に新聞紙面上のものが対象とされてきたが、近年ではオンライン Q&A サイトも分析対象となってきた。青木聡（2012）、河田承子・永野和男（2017）などがそれにあたる。河田・永野は妊娠に関する相談を分析し、オンライン空間では不安や悩みに対して共感的な内容の回答が寄せられる傾向があり、対面では打ち明けられない悩みを開示し、共感を得られるカウンセリングの場として機能していることを明らかにしている（河田・永野 2017）。しかし、こうしたカウンセリング的な場として機能することが必ずしもプラスに働くとは限らない。青木はオンライン空間での「片親疎外」の問題を取り上げ、オンライン空間では、専門家がアドバイスする際に心がける中立的な判断という要素が欠如してしており、実際の問題をかえって悪化させるリスクもあると指摘する（青木 2012）。

(3)　本稿では、「呪いたい」というケースだけでなく、「呪われている」というようなケースについても抽出している。というのも、誰かを呪いたいほどに不幸な状況と、誰かから呪われているほどに不幸な状況との明確な区別はなく、どちらも不幸の要因を他者に求めたいという点では共通しているからである。

(4)　「OKWAVE」は株式会社オウケイウェイブにより 2000 年 1 月に正式運用が開始された日本では最初期から運用されている Q&A サイトである。「Yahoo!知恵袋」や「発言小町」なども Q&A サイトとして有名だが、サービス運用から現在までの全ての質問が閲覧可能であったため、「OKWAVE」を分析対象とした。

(5)　共起ネットワークは、2 つの語の共起の割合を表す Jaccard 係数を、0.2 以上に設定して描画した。また、エッジは全体像をクリアにするため、最小スパニングツリーのみを表示した。ノードの大きさは頻度を、エッジの太さは共起の強さを表している。加えて、ノードの色は媒介中心性が高いほど濃くなるように設定した。媒介中心性とは、あるノードが最短経路上にどの程度位置しているかを表した指標である（鈴木 2017）。テキストマイニングの場合、語のネットワークにおいて重要な位置を占める語を見つける 1 つの判断材料となる。

参考文献

赤川学, 2006,「日本の身下相談・序説――近代日本における「性」の変容と隠蔽」『社會科学研究』57(3): 81-95.

青木聡, 2012,「『片親疎外』事例に対するネット書き込みの分析」『大正大學研究紀要』97: 174-67.

Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine Andere Moderne*, Frankfurt, Suhrkamp.（＝1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会――新しい近代への道』法政大学出版.）

Bellah, R. N., R. Madsen, W. M. Sullivan, A. Swidler, & S. M. Tipton, 1985, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life: Updated Edition with a New Introduction*, University of California Press.（＝1991, 島薗進・中村圭志訳『心の習慣――アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.）

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, England, Polity Press.（＝2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社.）

池田知加, 2017,「自分と家族の人生相談――読売新聞「人生案内」欄を資料として」『立命館産業社会論集』53(1): 29-48.

河田承子・永野和男, 2017,「オンラインコミュニティにおける妊婦の不安相談の内容と回答」『メディア・情報・コミュニケーション研究』2: 15-31.

小松和彦, 2014,『呪いと日本人』角川書店.

見田宗介, [1965]1984,「現代における不幸の諸類型」『現代日本の精神構造（新版）』岩波書店.

那須川哲哉, 2006,『テキストマイニングを使う技術／作る技術――基礎技術と適用ケースから導く本質と活用法』東京電機大学出版.

野田潤, 2004,「『子どもにとっての家族』の意味とその変容」『相関社会科学』84: 85-100.

OK WAVE, 2016,「幸せになりたい」, 2016 年 2 月 15 日,（2019 年 12 月 1 日取得, https://okwave.jp/qa/q9128320.html）.

――――, 2017,「頭がおかしい兄に悩まされています助けて下さい」, 2017 年 3 月 29 日,（2019 年 12 月 1 日取得, https://okwave.jp/qa/q9310963.html）.

大瀧友織, 2002,「夫婦間に生ずる問題とその変遷――『人生案内』の分析をとおして」『年報人間科学』23: 359-79.

鈴木努, 2017,『R で学ぶデータサイエンス８　ネットワーク分析　第２版』共立出版.

太郎丸博, 1999,「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」光華女子大学文学部人間関係学科編　『変わる社会・変わる生き方』ナカニシヤ出版.

鶴見俊輔, 1991,「身上相談」『鶴見俊輔集５　現代日本思想史』筑摩書房.